

## よく見て、自分で考える

私が教員として勤務し始めた当時の養護学校（特別支援学校）は、養護学校義務制がしかれたばかりであったため、特別支援教育（当時は特殊教育）に関わっていなかった教師が多く勤務していました。児童生徒の指導に当たっては、「実態把握の方法」や「指導内容及び指導方法」をどのようにしたらよいか、「児童生徒の行動」をどのように理解すればよいかなどについて、毎日、先輩教師から話を聞いたり、同僚と悩みを語り合ったりしていました。その中で、「目の前の児童生徒をよく見て、なぜその行動をとっているのかを考えることが大切。見て考えることから、行動の意味や次の指導が見えてくるのではないか。」ということを経験間で共有するようになりました。今、「PDCAサイクル」が言われていますが、「P」の前に、実態把握の「A（アセスメント）」が大切だということと同じであろうと思います。

数年が経過し、未熟で知識も経験もない私が後輩教師に「実態把握の方法」や「指導内容」などの話をする機会が増えました。話をすればするほど、「自分の経験や実践は間違っているのではないか。」「もっと別の方法があったのではないか。」などと、迷い考えるようになりました。

そんな時に、当時、特別支援教育を牽引していた先輩教師から「生徒の実態把握も指導方法も一つではありません。多面的に考えていくことを常に意識しないと適切な把握や指導はできない。」ということと、「『どうしたらいいか教えてください。』ではなく、まず自分で考え、自分なりの見立てをもつ。」という言葉をかけていただきました。

アンテナを高く立て、広く深く見つめ思考することは、一朝一夕で身に付くことではありませんが、日々、その努力を惜しまず研鑽することで力になっていくものだと思います。特別支援教育をさらに前へ進めるためにも、先輩教師から教えていただいた「よく見て、自分で考える。」を大切にしていきたいと思っています。